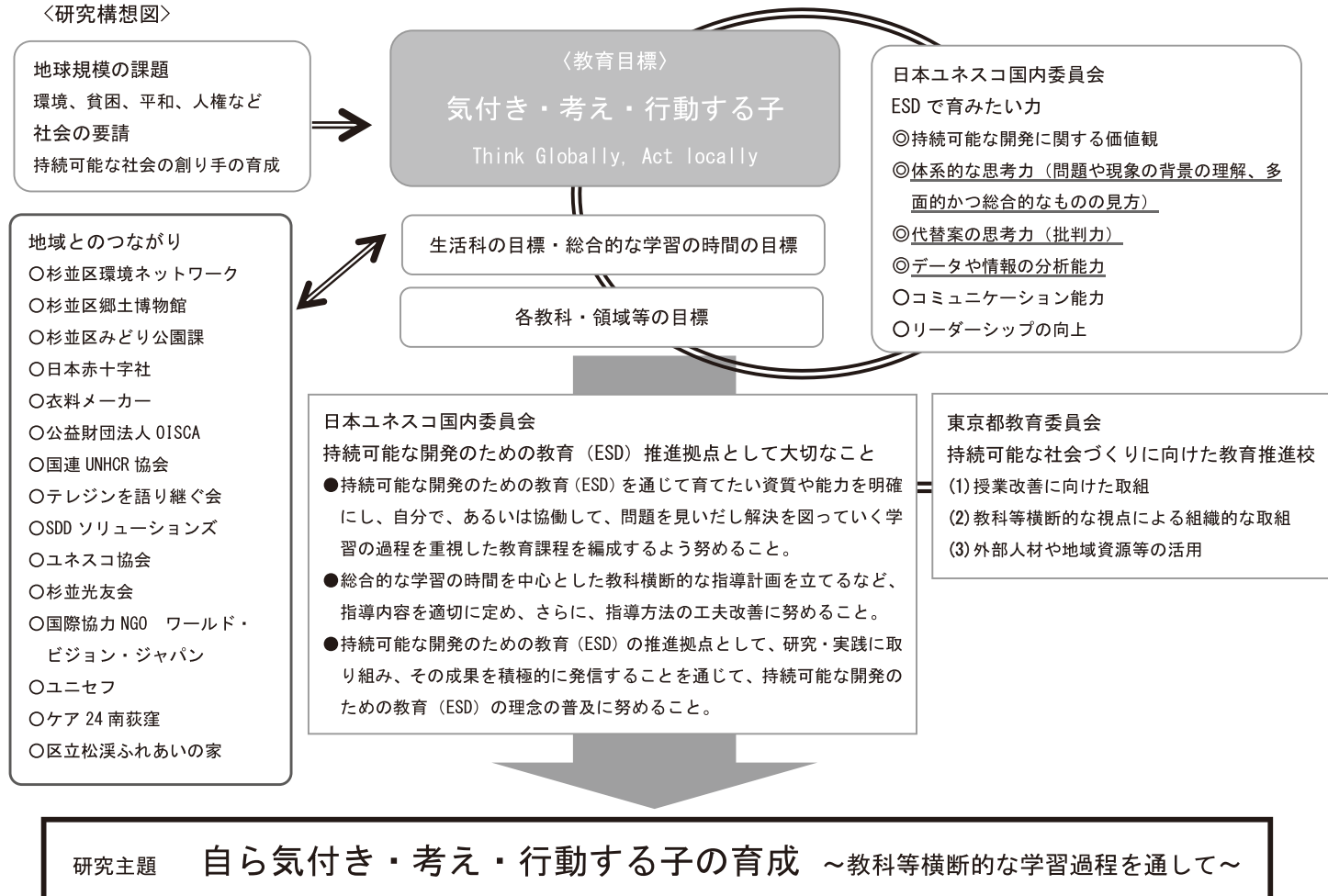


## 平成 30 年度 研究構想図

### I 研究主題 自ら気づき・考え・行動する子の育成 ～教科等横断的な学習過程を通して～

〈研究構想図〉



〈目指す児童像〉 人・自然・社会との関わりを大切にし、気づき・考え・行動する子			
	気付く	考える	行動する
低学年	〇自分と身近な人々、身の回りの事象との関わりに関心をもつ子	〇自分と身近な人々、社会及び自然が自分自身にとって、もつ意味に気づき、自覚できる子	〇対象と自分との関わりを深めることができる子
中学年	〇社会及び自然に興味関心をもち、課題に気付く子	〇多様な情報を取捨選択したり、分類・整理したりして、情報を再構成できる子	〇自らの願いの実現を目指して行動できる子
高学年	〇持続可能な社会の創造という視点で社会状況を捉え、課題に気付く子	〇目的に応じて、多様な情報を分類・整理し、多面的・総合的に分析できる子	〇社会における自分の役割を理解し、目的を明確にして行動できる子

#### 研究の視点

- ①カリキュラム・マネジメントを考える  
～ESD カレンダーの作成を通して～
- ②外部人材・地域資源等を活用して単元を作る  
～SDGs の視点を生かして～
- ③子供の学びの広がりを見つめる  
～価値観・問題解決能力の育成を通して～

#### 研究の内容

- ①-i ESD カレンダーの見直し
- ①-ii 他教科等と関連付けた授業
- ②-i 外部人材や地域資源等の活用
- ②-ii 学習過程の工夫
- ③-i 評価基準の作成と手だて
- ③-ii 児童の変容の見取り方
- ③-iii 児童の自己評価

## 1 研究主題設定の理由

2014 年（平成 26 年 10 月）、西田小学校は、ユネスコスクールに認定された。ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校である。文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点として位置付けている。

ESD とは、Education for Sustainable Development の略で、「持続可能な開発のための教育」と訳される。現在、世界には、環境・貧困・人権・平和・開発といった様々な地球規模の課題がある。ESD は、地球に存在する人間を含めた命ある生物が、遠い未来までその営みを続けていくために、これらの課題を自らの問題として捉え、一人一人が自分にできることを考え、実践していく力（Think globally, Act locally）を身に付け、課題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である。つまり、ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育む教育である。

このような教育の方向性は、新学習指導要領の改訂においても述べられており、子供たち一人一人が、地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分たちができることを考え、多様な人々と協働し実践する力をもった人材が求められている。しかし、日本の子供の現状として、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べること、学ぶことの意義が実感できているかどうか、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識をもっているかどうか等について、肯定的な回答をした子供が諸外国より低いという課題があることが「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会）」の中で述べられている。

これらを踏まえ、平成 29・30 年度の研究主題を次のように設定した。

自ら気付き・考え・行動する子の育成 ～教科等横断的な学習過程を通して～
-------------------------------------

## 2 研究主題の捉え方

### ①気付く

身の回りの人・自然・社会との関わりに興味・関心をもち、地域の将来、地球の将来などの課題を見付け、自分事として捉えること

### ②考える(Think globally)

問題や現象の背景を理解したり、多面的・総合的に物事を判断したり、物事を批判的に捉え代替案を考えたりするなどして、考えを広げ深め、新たな知を創造すること

### ③行動する(Act locally)

課題解決に向けて、自分の願いの実現や役割の達成を目指して行動すること

### ④教科等横断的な学習過程を通して

生活科・総合的な学習の時間を中心とした教科等横断的な学習のカリキュラムを基に学習過程を工夫し、上記のような力をもつ子を育成する。

### 3 研究の視点

#### ①カリキュラム・マネジメントを考える ～ESD カレンダーの作成を通して～

生活科・総合的な学習の時間を中心とした教科等横断的な学習過程を組むことの意義は、いくつかある。

第一は、問題解決の質を高めることである。総合的な学習の時間や生活科で扱っている題材を用いて、各教科等のねらいに合わせた学習をすることで、よりよく情報を整理・分析できたり、調べたこと、感じたこと、考えたこと等を表現したり、交流したりすることができる。第二は、よりよく価値観を広げることである。各教科等で学ぶ内容と、総合的な学習の時間や生活科で扱っている題材を関連付けて学ぶことで、教科等のねらいをよりよく達成できるとともに、価値観の広がりにつながる。第三は、各教科等の学びの質を高めることである。総合的な学習の時間や生活科で学んでいるテーマと各教科等の学習を関連付けることで、学ぶ意義を高めたり、よりよく学んだりすることができる。なお、第二と第三は、表裏の関係にある。

#### ②外部人材・地域資源等を活用して単元を作る ～SDGs の視点を生かして～

外部人材や地域資源等の活用を積極的にしていく。活用することのよさは、二つある。第一は、専門的な見地からアドバイスを受けながら、授業作りをすることで、問題解決の質を高めることができるという点である。第二は、外部講師の方の講話や地域資源等の活用を通して、よりよく価値観を広げることができるという点である。実際に活動をしている方の価値観や実際の事物に触れることで、児童が、身の回りの事象に興味関心をもち、自分事として関わるができる。

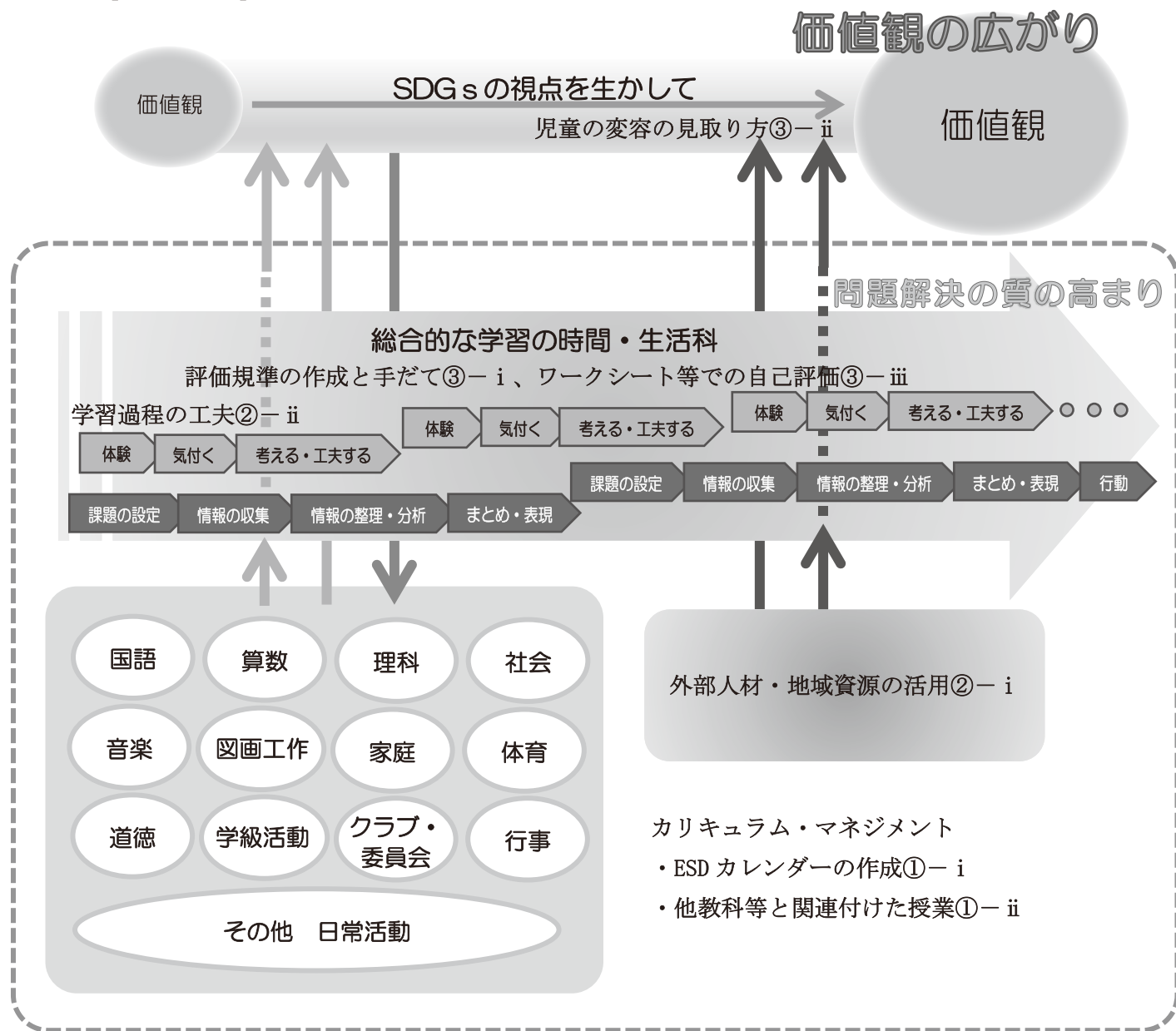
SDGs は、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現を目指し、17 のゴール・169 のターゲットから構成されている。単元開発では、これらの SDGs の視点を、価値観を育む際の指標としていく。

#### ③子供の学びの広がりを見つめる ～価値観・問題解決能力の育成を通して～

持続可能な社会の担い手を育てるために、第一は、問題解決に必要な力の育成が大切である。問題解決の学習過程ごとに身に付けさせたい力の観点を立て、それぞれに評価規準を設定することで、目指す児童像が明確になり、児童がどの段階にいて、どんな手だてを講じるとよいか、考えることができる。また、児童自身が問題解決の仕方を知り、自分が全体の学習過程の中のどの段階にいるのかを自己評価しながら、問題解決に取り組むことから身に付けさせたい力にアプローチしていく。

第二は、持続可能な開発に関する価値観を身に付けることである。問題解決の学習過程の中のいくつかのポイントで、各学年がテーマとしている価値観について、児童がどのように捉えているかを見取り、授業づくりに生かしていく。また、児童自身も自らの価値観の広がり振り返り、自身の変容を実感できるようにしていく。

【イメージ図】



#### 4 研究仮説

探究的な問題解決のプロセスを繰り返す過程で、持続可能な開発に関する価値観が広がり、持続可能な社会に向けて、自ら気づき・考え・行動することができるようになるだろう。

持続可能な社会の担い手となるためには、平和、環境、福祉など地球規模の課題に向けた個人の価値観を広げていくことが大切である。本研究では、各テーマを追究する際に、質の高い探求的な問題解決のプロセスを繰り返すことが、結果的に価値観の広がり結び付くと考えた。



## 5 研究の内容

### ①ー i ESD カレンダーの見直し

- ・年度初めに、昨年度の学年と合同で今年度の ESD カレンダーを作成し、これまでの成果と課題を生かし、作成する。
- ・年度中も、必要に応じて修正していく。
- ・年度終わりに、1 年間の学習を振り返り、ESD カレンダー修正版を作成する。

### ①ー ii 他教科等と関連付けた授業

- ・総合的な学習の時間や生活科の学習を中心にして、各教科・領域と関連付けた授業を実践する。

### ②ー i 外部人材や地域資源等の活用

- ・児童の主体的な学びにつなげるため、外部人材や地域資源等の活用の仕方や協働の在り方について考え、単元を作る。
- ・協力者リストを作成し、ユネスコスクールとして、今後も地域とつながりのある教育活動を行えるようにする。

### ②ー ii 学習過程の工夫

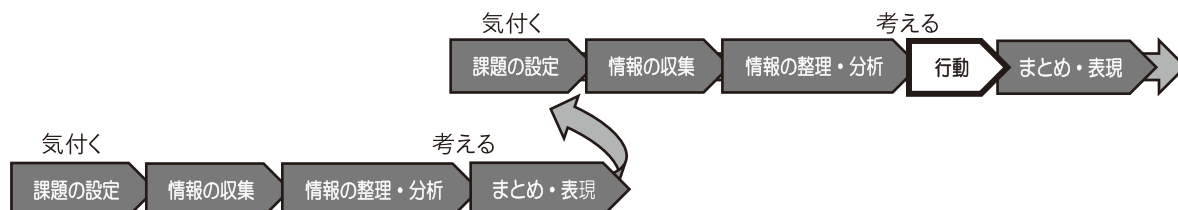
#### ○生活科



- ・「気付く」: 身近な人々、身の回りの事象に働きかけ、働き返されることを通して、気付く過程
- ・「考える・工夫する」: 体験を通じた気づきを自覚し、伝えたり表現したり、工夫を考えたりする過程
- ・「行動する」: 気づきを生かした前よりも質の高い体験をする過程

- ・このような学習過程を繰り返すことで、「気づき」と「体験」の質が高まっていき、児童が主体的に活動できるようにすることを目指す。

#### ○総合的な学習の時間



- ・「課題設定」: 社会及び自然に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、課題を見付け、到達点やそこへの道筋を見通す過程
- ・「情報の収集」: 具体的な問題について情報を収集する過程
- ・「情報の整理・分析」: 収集した情報を整理・分析し、情報を再構成したり、知識を構造化したり、問題の解決に向けた考えを出し合ったりする過程
- ・「まとめ・表現」・「行動する」: 明らかになったことをまとめ、表現し、そこからまた新たな課題を見付けたり、課題解決に向けた行動をしったりする過程・行動したことを振り返り、成果や課題をまとめ、表現する過程

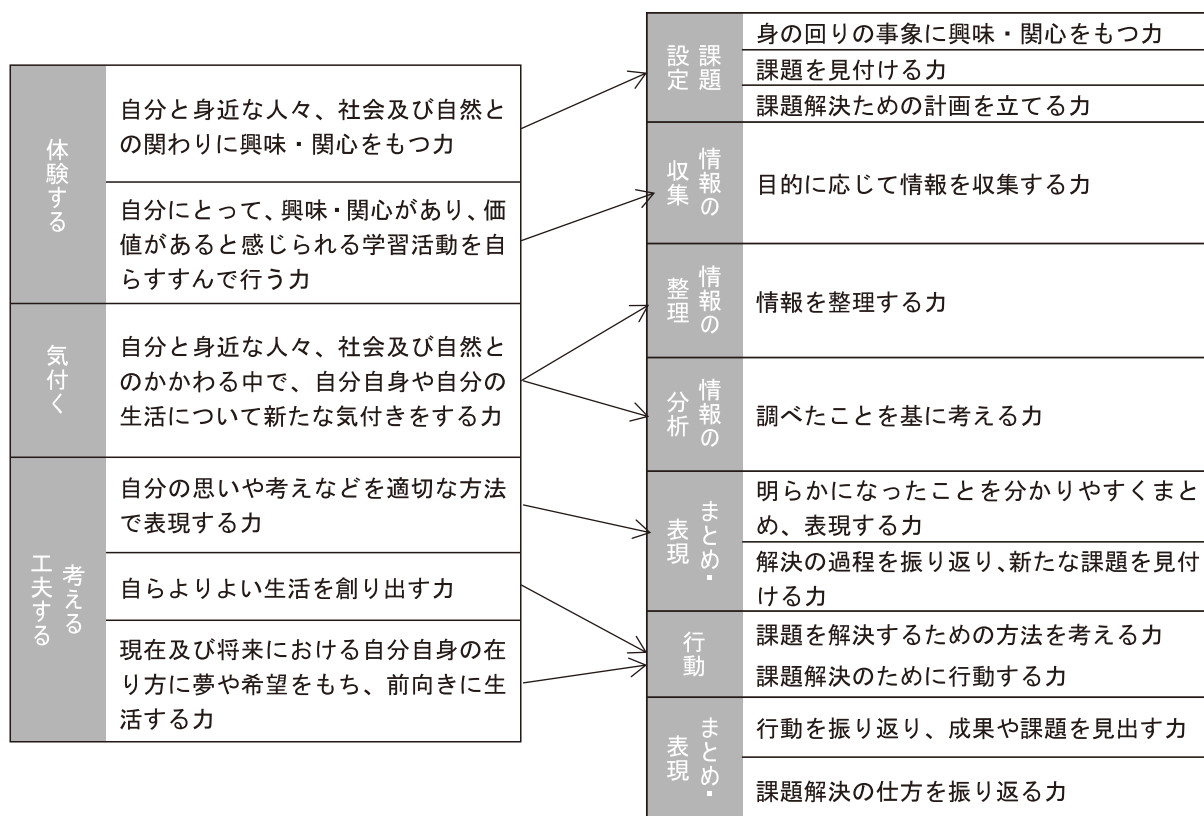
- ・このような問題解決の学習過程を発展的、そして連続的に繰り返すことによって、課題追究のプロセスの質が高まり、児童が、持続可能な社会の担い手として必要な問題解決能力を身に付けることを目指す。
- ・なお、学習過程については、問題解決の仕方に応じて、順序を変えるなど、柔軟に組み立てていく。

### ③ー i 評価規準の作成と手だて

- ・育みたい力を明確にし、評価規準を達成するための手だてを講じる。評価規準については、次の観点で作成していく。また、授業では、手だての効果を検証する。

#### ○生活科

#### ○総合的な学習の時間



### ③ー ii 児童の変容の見取り方

- ・活動の節目で、ワークシートを活用し、価値観について記述する時間を設ける。

### ③ー iii 児童の自己評価

- ・③ー ii で活用したワークシートに価値観について記述することを通して、自己の価値観の広がりを実感できるようにする。
- ・学習過程ごとに、児童が自己評価するための項目を整理する。または、学習感想を書く観点（例：何をしたか、分かったこと、どのようにして問題解決をしたか）を提示する。

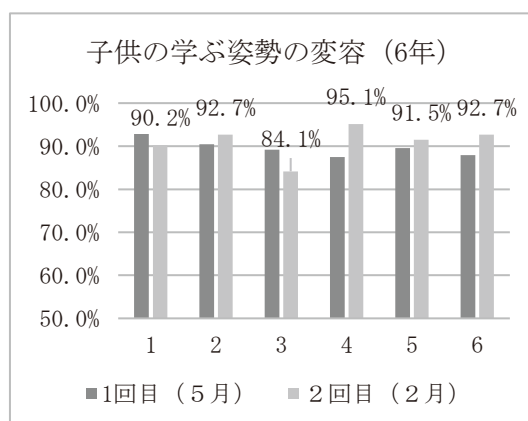
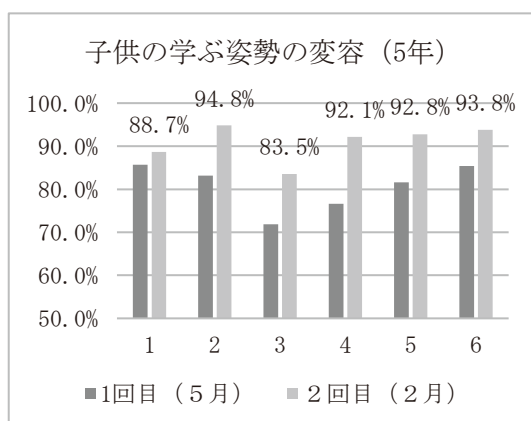
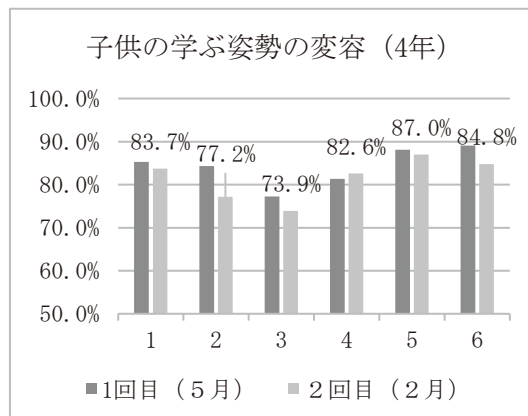
## 6 これまでの研究の成果と課題

### ①児童の変容（学ぶ姿勢）

平成 29 年度 東京都「持続可能な社会づくりに向けた教育推進校」意識調査の結果である。調査は、5 月と 2 月に行った。（4 年：101 名 5 年：101 名 6 年：85 名）

#### 〈質問内容〉

- 1 授業の中で友達や先生と話し合うことで、自分の考えが広がったり深まったりしている。
- 2 授業の中で学んだことをいくつかつなぎ合わせて、自分なりの考えをもつことができています。
- 3 授業の中で、自分の課題を見付けて解決策を考えるようにしている。
- 4 自然環境や地域、地球全体の課題を、いくつか挙げることができる。
- 5 環境問題など地球全体の課題は、自分にとって身近な課題だと思う。
- 6 持続可能な社会をつくるために、社会の役に立ちたい。
- 7 他の人と協力して、持続可能な社会をつくっていききたい。



### ◎地球全体の課題を自分事として捉えている

「5 環境問題など地球全体の課題は、自分にとって身近な課題だと思う。」については、どの学年も肯定率が上がった。各学年で4年福祉、5年環境、6年平和というようにテーマを明確にして学習していること、また、ESD 子供報告会等で、学年間で身近な課題から世界の課題まで、互いに報告し合う機会があることが要因と思われる。特に、5・6年生は、肯定率が大きく上がっている。高学年として客観的に判断できる段階になったことに加え、環境問題、飢餓や紛争、国際協力などの地球全体の課題をテーマにして学習をしてきたことで、世界とのつながりを考えたり、自分にできることを考えることを通して、自分の行動が地球の課題に働きかけることを感じたりすることができたのだと考えられる。

### ◎学びを相互に関連付けより深く理解したり、考えを形成したりする力がついている

「2 授業の中で学んだことをいくつかつなぎ合わせて、自分なりの考えをもつことができています。」について、5・6年生は、肯定率が上がっている。特に、5年生は、10ポイント以上高く、上がっている。その理由として次の三点が考えられる。

- ① ESD カレンダーを基にして教科等横断的な指導を行っていることから、学びがつながっている意識に変容してきた。
- ② 情報の整理・分析の過程で、思考ツールを活用し、調べたことの因果関係やつながりを整理したことから、考えをもつ活動を積み重ねたことも効果的だった。
- ③ 外部講師を積極的に活用し、何度も環境や平和についての話を聞き、それらを関連付けて感想や考えを書く機会が多かった。

#### ◎持続可能な社会づくりに向け、自分にできることを、他者と協力して行動しようという意欲が高い

「6 持続可能な社会をつくるために、社会の役に立ちたい」、「7 他の人と協力して、持続可能な社会をつくりたい」について、5・6年生は、肯定率が上がっている。特に、5年生は、10 ポイント程度上がっている。課題解決のために行動するところまで大切にしてきた学習過程の工夫や、「気づき・考え・行動する」という目指す児童像として「行動する」までを掲げ、教員が指導をしてきたことが、子供たちの意識にも反映されていると考える。また、課題ごとにグルーピングをして、グループで協力して活動する場が多かったことも、この結果につながったと考えられる。

#### ▲自ら課題を見付け解決策を考えることに苦手意識をもっている

「3 授業の中で、自分の課題を見つけて解決策を考えるようにしている」について、5年生で肯定率の上昇が見られるものの、どの学年もほかの項目に比べ、肯定率が低い。学習過程の「課題の設定」で、世界の状況等を提示したり、「行動」で、社会で課題解決のためにどのような団体がどんな思いで活動しているかについて学ぶ機会を設けたりしているものの、自分で考えたり行動したりするまでには難しい。目指す児童像に挙げた「気付く」について、低学年から丁寧に積み上げていくこと、改善に向けた取り組みを委員会活動や日常生活にも広げ継続していくことが必要である。

全体として、5年生が急激に伸び、6年生は高い値を維持していた。高学年は、客観的に物事を判断できる年頃であり、下の学年から継続して問題解決の学習過程を繰り返してきたことの成果が出たといえるだろう。また、4年生までは、地域を題材にしており、5年生から、地球全体を題材としているという点も、高学年が地球全体の課題を自分事としてとらえ、持続可能な社会づくりに関心が高いことにつながっていると考えられる。5年生は、年間を通して、公益財団法人オイスカと連携し、専門的なアドバイスを受けながら指導計画を立てたり、地球の現状について、実際に活動している方から話を聞いたりしたことも成果につながった。アンケートの質問内容のような姿勢は、短期間で身に付くものではない。ESD カレンダーを活用した教科等横断的な学習過程の工夫、外部人材等の活用、目指す児童像や学習過程ごとの評価規準の設定などを継続して行っていくことが大切である。

## ②教員の変容

ユネスコスクールとして3年間実践をしたことで、教員の意識はどのような変容したのかを、教員にインタビューを行った。

### 1 ESDを通した目指す教師像



目指すのは、地域や外部人材を活用して子供を育てていく先生です。専門知識のある方から話を聞く方が、グッとくるものがあり、感動するので、子供もこれではいけないと思うことはあるのではないかと思います。一緒に学んでいます。

ユネスコスクールになって、子供をどうやって育てるかという方法を考える視野が広がりました。自分の中で変わったことは、地球規模で持続可能な社会づくりを目指した教育をするために、子供をどう育てるかという具体策を考えるようになったことです。未来の日本の子供を育てたいと以前から思っていたましたが、地球規模という意識は全然なかったです。

教員から全部与えるのではなく、自然な感じで子供が考えたいと思わせるような、指導ができるようになりたいと思います。

ESDを通して、総合的な学習の時間の指導が、今まで以上に充実したものになりました。さらに、ESDなので、行動と結び付けることが大切だということ、あと、完結もしないのだということ、問い続けることも分かりました。自分自身、どんどん新たな問いが生まれてくるような学習を仕組むことができるようになったと感じます。総合的な学習の時間から他の教科につながっていくというカリキュラムのつながりが分かるようになり、カリキュラムから考えられるようになりました。



子供がこれから社会に出て、生きていけるように今の段階で必要な知識や技能を身に付けさせることができる教師になりたいです。

そのためには、自分が社会をもっと見ていかないといけないと感じています。外部人材の方が来ると、世界がどのようなになっているかが分かることが多い。教員は、だれかが開発したことを分かりやすく伝えるのは得意だと思います。でも、他の先生から聞いたことですが、これからの先生は自分から創っていかなければならないという言葉聞いて、すごく納得しました。



### 2 ESDから見た児童の実態

地球規模の視点に立ち、日本人としてではなく、地球人として考えられる子供になってほしい。日本は、課題に気付きにくい国だと思います。

ESDを通して、子供たちは整理する力が付いてきたと思います。4年生でも整理の仕方は学習してきましたが、5年生になって新たな方法を学んで、どちらの方法がいいかなと考えた子供がいました。社会科の学習でも、どう分類したらいいかを考えたときに、総合的な学習の時間で使った方法でやってみようとする子供が出るなど、問題を解決する力の一つとして分類・整理する力が付いてきました。



いい意味で学校文化を壊してほしいです。西田小の子供は、先生が主導の授業で、教わることを求めているところがありますが、もっとクリティカルに考えて、何のために学ぶのか、活動するのかということをもっと考えてほしいです。自分自身も活動の目的を考えて授業に臨むようにしているし、子供たちにも目的意識をもって学習に取り組んでほしいと思います。

子供たちは、自分の思いを表現できるようになってきましたが、他の意見に対して批判的に聞く様子はあまり見られません。「どうしてそう思ったの?」「何を根拠に考えたの?」とすすんで質問をし、考えを広げていく児童の姿が多く見られるよう指導していきたいです。





### 3 ESD カレンダー作成について



柱が一貫していることが一番のポイントです。総合的な学習の時間にいろいろな教科がつながっていて、これとこれを一緒に学習しようという考え方ができるのが一番のメリットではないかと思っています。特に昨年度と今年度は、国語の話すこと・聞くこと、書くことは総合的な学習の時間と関連付けてやってきましたし、社会の学習も進度を合わせて学習したので、それらはとても良かったと思います。

ESD カレンダーは一人で作るのは、難しいです。今の学年には、社会科を研究している教諭がおり、環境学習と社会を関連させることができました。学年としてのチーム力、また、他教科の先生方とで話し合えることができることが大切です。また、今年のように、全部の教科書を並べて、ページをめくりながら学年でカレンダーを作っていく時間も必要だと思いました。あと、前の年に担当した学年に関わることは、作る学年にとっては良かったのではないのでしょうか。やはり、昨年度は何をしたのか聞くことが大切だと思います。

国語の教科書に載っている題材だけで学習活動を考えても、子供の実態に即した内容にならず、あまり内容が深まらないことがあります。例えばインタビューの教材では、総合的な学習の時間とどう関係付けられるかと考えると学習が効率的、有機的になります。教科書に載っている題材や教材を柔軟に結び付けられる力をもつこと、こじつけではなく有機的に結び付けることができることがポイントだと思います。柔軟になるには、その学年を何度か経験した教員が作りやすいのか、初めて経験する人が新たな視点で考えた方が作りやすいのか、その両方がいた方が作りやすいのか。話し合って作っていくのがポイントで、一人ではきっと難しいと思います。

難しいのは、その年の行事予定に左右されるという点です。教務の立場からだと、移動教室の位置などがあり、それによってカレンダーがかなり動きます。また、カレンダーが動くことで、外部人材を招く順番も変わり、昨年度の通りには行かなくなってしまうことが難しいです。



### 4 総合的な学習の時間の単元づくりについて

悩むのはどこまで教えて、どの部分を子供たちに考えさせるのかです。私は、もともと考えておくというよりも、子供の反応を見ながら授業をつくっていくことが多いです。やってみないと子供がどう反応するか分からないので。

これまでの実践では、6年生の平和をテーマにした学習は、自分自身も興味があったし、やってみて楽しかったです。子供たちは、8月6日が何の日か知らない。そこから始まりました。

苦労したのは、子供が調べたり、ゲストティーチャーの話を聞いたりして、それを他の人に伝えるときに、知識ばかりの話になってしまったところです。もっと当事者の思いなど自分が感じたことを伝えることが大事であることに気付かせるのが大変でした。



単元づくりで難しいのは、きっちり固めると柔軟に対応できなくなるという点です。1学期ぐらいまでは計画を立てるけど、2・3学期まではぼんやりとしたものでしか計画を立てることができません。でも、外部講師を招くためには事前に計画しておかなければならず、結局児童の反応を誘導せざる負えなくなったりするので、ジレンマが生じることになります。そこが、単元づくりで悩ましいところです。

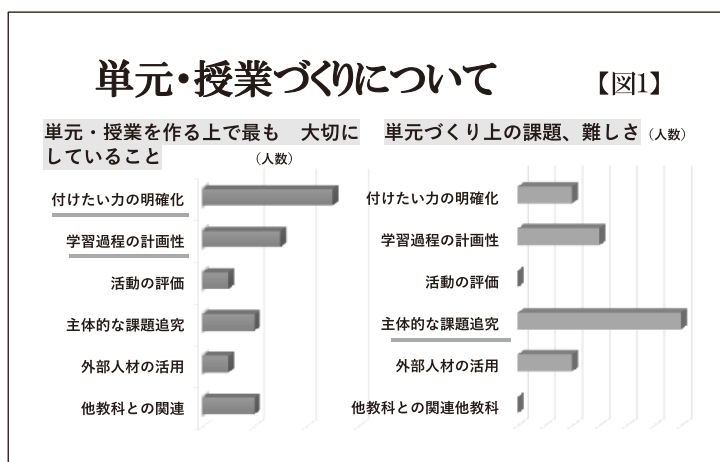
実践してきてよかったことは、子供たちが問題解決をしようとする姿をちゃんと評価できるようになり、頑張りを見取れるようになったことです。さらに、そこから授業をつくることもできるようになりました。





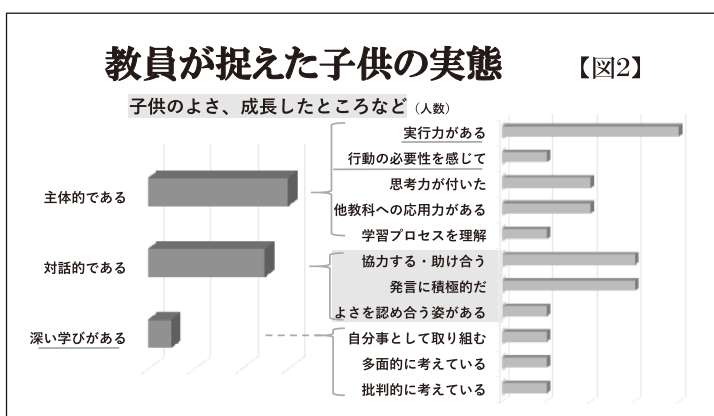
## Column ～教員はどのように変わったか～

「ユネスコスクール NISHITA の挑戦」として試行錯誤した3年間は、教員にどのような変化をもたらしたのでしょうか。数人の教員に聞きながら教員の意識を探ってみました。



### 授業作りの情熱×追究活動のジレンマ

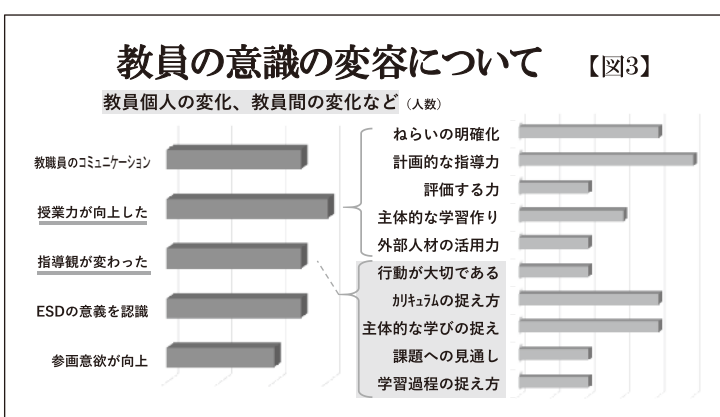
総合的な学習の時間をする上で教員は何を感じながら指導しているのでしょうか。【図1】を見ると、子供に付けたい力ははっきりしているものの、主体的に取り組ませるのは難しい…というのが多いようです。「学習計画における難しさ」では、子供の反応に応じて予定を変更しながら進める大変さと、外部人材を招聘する日時が変更できないジレンマが話題になりました。授業作りに試行錯誤は続きますが、逆に面白さも感じている教員の姿がありました。



### 主体的な学びの姿×「実行力」・「行動への意識」

ESD の学習を通して子供はどう変容したと教員は思っているのでしょうか。【図2】を見ると「主体的・対話的」に関しては変容があったと感じています。

「子供たちの良さは、自分たちで何とかしようとすることだ。」「行動して初めて形になるという意識がある。」といった発言がありました。主体的な学びを行動と結び付けて捉えるようになったことが教員の変容といえるのではないのでしょうか。



### 教員の変容を教員自身はどのように感じている？

教員に自己評価をさせるとどんな反応がかえってくるのでしょうか。【図3】を見ると、「授業力が付いた」「指導観が変わった」が複数挙げられました。校内研究によって授業力が向上することは当然なことかもしれませんが、「指導観が変わった」という反応はあまり見られないように思います。「行動することの大切さを意識するようになった。(めざす姿)」「一つの教科だけで終わってはいけないという意識が出

てきた。(カリキュラムマネジメント)」などが教員の発言から出てきたものです。調査をして着目したい点は「教員のコミュニケーションが盛んになった。」という発言です。総合的な学習の時間や生活科の学習を充実させるための打合せが必要となり、確かに学年内や学年を超えて情報共有をする姿が見られるようになりました。組織としてのコミュニケーション意識が主体的・対話的な教員へと変容させ、働き方の効率化にもつながっています。

◆ 参考文献 「ユネスコスクール NISHITA の挑戦 ホールスクールアプローチ2年間のあゆみ:ESD からみた教師と子供の変容について」